The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前期ハイデガーにおける時間性と歴史性
Author(s)	土井, 理代
Citation	メタフュシカ. 1998, 29, p. 101-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前期ハイデガーにおける時間性と歴史性

土井理代

一　はじめに

本稿は、現存在の時間性と歴史性について『存在と時間』（一九二七）で記述されている事柄を解釈することを目的とする。「時間性と歴史性」という言葉は第二編第五章の表題であるが、われわれはその一つの章だけに着眼するのではなく、「時間性と歴史性」という問題を『存在と時間』全般にわたる問題として捉えたい。歴史的なものを理解するうえで、いわゆる一方向に流れる時間（リニア時間）に対し、歴史的なものに固有な時間の構造を際立たせることが、ハイデガーにとっていかに重要であったか、また、ハイデガーのような仕方で、リニア時間を突き抜けて、歴史的なものに固有の時間構造を捉えようとしたとき、どのような可能性に出会うのかということを、本稿を通して考えてみたい。

二　物理学的時間と歴史の時間

議論の出発点としてわれわれはまず、ハイデガーの哲学的経歴の最初期に属する試験講義「歴史科学における時間概念」（一九一六）を取り上げる。『存在と時間』のプロトタイプとして指摘されるいくつかのテクストのうち、最も早い例は戦後困窮学期の講義（一九一九）であるから、この試験講義はまだ『存在と時間』へ至るハイデガー独自の思想展開の過程には属さない、と考えるのが妥当であるが、ハイデガー自身『存在と時間』の中の或る脚注（SZ, S. 418-9）で、歴史科学における年代学（Chronologie）のもつ意義に関し、この試験講義を指示していることからもわかるように、時間概念への着目という点に限って言えば、この二つのテクストを関連づけることは自然なことであろう。

この講義のハイデガーの立場は、既存の個別科学を事実(Faktum)と捉え、その科学が可能であるための条件を問うという手法をとる点で、しかも、その意図があくまで学問論としての論理学への寄与にある点で、新カント学派的（西南ドイツ学派的）であると言ってよい。この立場は、諸科学の分岐を諸科学が対象を構成する仕方、すなわち諸科学が用いる「範疇」の原理上の違いによって生じるものと見なし、その範疇の原理上の違いを明示することを課題とするが、ハイデガーもこの西南ドイツ学派的な行き方に沿い、その枠内で「時間（Zeit）」という一範疇に着目する。「時間」という一つの基本的な範疇が、現行の自然科学（とりわけ物理学）と歴史科学の間では種別的に異なっていると見なされ、その違いを明らかにすることで、それぞれの学の違いを――とりわけ歴史科学の特殊性を――際立たせるのが彼の目論見であった。

さてハイデガーによれば、運動の法則性を数学的に把捉することを目標とするのが物理学であるが、「任意の点Pの時間的に継起する一切の位置（Lage）の総体」(GA1, S. 422)という「運動」の定義に「時間」が含まれることから、物理学における時間は「運動の数学的規定が可能であるための条件」(GA1, S. 423)と位置づけられる。つまり運動の測定が可能であるためには、それ自身測定可能な時間、すなわち「一つの点から別の点へと飛躍することなく一様に（gleichförmig）流れ続ける」(GA1, S. 423)目盛り、あるいは「一つの均質的（homogen）な位置の秩序（Stellenordnung）」としての時間が前提されねばならない、と見なされる。したがって「時間は物理学において、測定可能な時間、測定されうる時間としてのみ有意味な機能を果たす」(GA1, S. 424)と結論される。

一方、歴史科学の目標は過去の世界を叙述することにあるが、ここでは、「歴史家と彼の対象との間には時間的な溝がある」(GA1, S. 427)ゆえ、「時間の乗り越え（Zeitüberwindung）」が不可欠の契機となる。この場合「時間［＝時代］」とは、物理学におけるように均質的な性格をもっているのではなく、むしろ「歴史の諸々の時代［＝時間］は互いに質的に異なっている」(GA1, S. 431)とされる。例えば或る特定の時代に属する事物にはその時代らしさを示すメルクマール――その時代の刻印（das Gepräge der Zeit）(GA1, S. 429)――が刻み込まれており、史家は（史料を批判にかける際）そのようなメルクマールにこそ着目する。「ヒストーリッシュな諸時間も確かに継起しはする――さもなければそれはおよそ時間ではないだろう――が、各々の時間はその内容的構造の点で別の時間である。ヒストーリッシュな時間概念の質的なるものとは、歴史のなかで与えられる生の客観態の濃縮――結晶――にほかならない」(GA1, S. 431)。

以上のようにハイデガーは、物理学における時間概念と歴史

科学における時間概念の相違を、端的に言って、量的な時間と質的な時間という形で対比させるのだが、ここで言われている量的な時間、すなわち、「一様に流れ続ける」「均質的な位置秩序」という性格をもつ物理学的時間は、『存在と時間』で言われる「今-時間（Jetzt-Zeit）」の原型であると考えられる。この点に限れば、われわれここにこの二つのテクストの連続性を認めることができると思われるが、「原型である」という言い方をするのは、以下にも見るように、『存在と時間』における「今-時間」は、もはや単に物理学という一科学に固有の時間概念として取り上げられるのではなく、われわれを支配する通俗的「時間」表象という形で、より射程の広い概念として登場するからである。そしてそれが通俗的時間概念という、より支配的な位置を占めることによって初めて、直線的で不可逆的な今時間の表象が、われわれの歴史理解、すなわち「過去」という概念のもち方にまで影響を及ぼす、ということも示され得るであろう。しかしいずれにせよ試験講義のハイデガーにとって重要であったのは、そのような物理学的時間概念から歴史科学に固有の時間概念を際立たせることであり、その目論見は、表面上は確かに果たされてはいる。しかし、ここにはいくつかのさらに解決されるべき問題がひそんでもいる。

ハイデガー自身、われわれが上で引用した「各々の時間はその内容的構造の点で別の時間である」という文に、次のような書き込みを加えている。「『である』とは、ここではどういうことなのか。客観的な［諸々の］質が問題なのではない」（GA1, S. 431 Fußnote a）。この書き込みをわれわれは次のように解釈する。すなわち、ここでハイデガーが突き当たっているのは、時代ごとに固有の質をもつと考えられる歴史における複数の異質な時間が、そのようなものとして存在する在りようが、差し当たり不明であるという問題である、と。異質な時間は互いに並立的に「存在する」のではなく、継起する（aufeinanderfolgen）とされているが、継起する中でそれら異質な時間はどのように「存在する」のか。この講義のハイデガーは、「生の客観態」という、ディルタイを思わせる言葉を用いてもいるが、歴史の時間、あるいはこう言い換えてよければ歴史的世界の存在性格とは、どのようなものなのか。

われわれはこの問いを、カッセル講演（一九二五）[1]のうちに見出すことができる。そこでハイデガーはディルタイについて次のような主旨のことを述べている。すなわち、ディルタイは生が歴史的-であること（Geschichtlich-Sein）を示しはしたが、そこからさらに、歴史的-であること（歴史的-存在）とはどういうことなのか、問うことをしなかった、と（DJ8, S. 173）。それでは、フッサールの現象学はもちろん、ディルタイでさえ問うことがなかったとされるこの歴史性（Geschichtlichkeit）への問いを、ハイデガー自身はどのように展開するのだろうか。

ハイデガーはこの問いを、現存在の歴史性への問いとして引き受けるのである。

三　『存在と時間』における三つの時間

現存在の歴史性について最もまとまった記述が与えられているのは、『存在と時間』の第二編である。しかし、そこでの記述でさえいまだ断片的な感がある。事実ハイデガーは次のように述べてもいる。「現存在の歴史性の実存論的解釈は絶えず不意に暗がりへ落ち込む。適切に問うための可能な諸次元が解きほどかれておらず、また存在の謎、そして［……］運動の謎がすべての次元で横行するゆえ、それだけいっそうこの暗さが取り除かれることは少ない」(SZ, S. 392)。もっとも、事柄として十分明らかにされたとは言えないまでも、上の問い、すなわち現存在の歴史性への問い（歴史的であるとはどういうことか、という問い）に、『存在と時間』のハイデガーは、一応の解答を与えた。すなわち、現存在の存在が歴史的であるとは、脱自的‐地平的(ekstatsich-horizontal)時間性を根拠として、己の既在性(Gewesenheit)において開かれているということである、というように(Vgl. SZ, S. 393)。

歴史性についてのこのような規定からも、ハイデガーにおいて現存在の歴史性が、現存在の時間性(Zeitlichkeit)に基づいて捉えられようとしていることは明らかである。では、ハイデガーは現存在の時間性をどのような現象として捉えたのか。この節ではまずこの点を見ていくことにする。そして最終的に、この時間性と「今‐時間」(試験講義で言われた物理学的時間概念を原型とする、と先程指摘された)とがどのように関係づけられるのか、という点を論じる。しかしその際、現存在の時間性とともに時熟するとされる世界時間(Weltzeit)という現象が見過ごされてはならない。というのも、周知のようにハイデガーは現存在を世界‐内‐存在(In-der-Welt-sein)として捉えるからである。

三―一、現存在の時間性（根源的時間）

ここでは、現存在の時間性の基本的性格を、後の議論に必要な範囲で見ておくことにしよう。上の引用にもあったように、現存在の時間性は、脱自的‐地平的な構造をもつ。では、脱自的‐地平的構造とはどういうものなのか。ハイデガーに従えば、脱自的‐地平的な時間性とは、既在・現在・到来の三つの脱自態(Ekstase)(ないし地平 Horizont)がそのつど統一的に時熟する(sich zeitigen)、という現象を指す。この三つの時間規定は、「脱自態」や「地平」という性格づけが示しているように、あるいは「そのつど統一的に時熟する」という言い方が暗示しているように、通俗的な意味での過去・現在・未来、という概念

とは異なる。むしろハイデガーは、われわれ自身が根源的時間（つまり時間性）である、と見なしているのである。[2] われわれは少なくともここに、均質に流れる物理学的時間とは異なる次元の時間が開かれようとしていることに気づくであろう。

さて、ハイデガーからすれば、現存在自身が時間そのものなのであるから、時間性の議論は、現存在の存在についての議論と重なる。[3] よく知られているように、現存在の存在自身が、次のような等根源的な三相をもつと解されるのである。すなわち（一）自己をさまざまな存在可能性へ向けて投企する（entwerfen）という面、（二）今現にある自己として投げ出されている（geworfen）という面、そして（三）世界の（差し当たり周囲世界の）さまざまな事物との関わりに没入している――これは或る種の自己喪失である――という面である。そして現存在の存在（すなわち関心 Sorge）はこれらの三契機、すなわち（一）実存性、（二）事実性、（三）頽落の三契機の統一のうちに成り立つ、と解釈されるのだが、これがそのまま（一）到来、（二）既在、（三）現在、の三地平として、時間的に解釈され直すのである。

ハイデガーはこれら三つの契機のうち、時間性は本来到来から時熟すると言って、常に（一）の契機に重点を置く（Vgl. SZ, S. 329）。つまり「現存在とは第一次的に可能存在なのである」（SZ, S. 143）。実際、人間はさまざまな存在可能性との関わりのうちにある。ハイデガーの記述に即して言えば、例えば『存在と時間』で最初に「現存在」の語が持ち出される箇所で、（存在とは何かと）問うこと（Fragen）が、われわれのもつ存在可能性（Seinsmöglichkeit）の一つとされ（SZ, S. 7）、また周囲世界分析のところでは、道具連関の行き着く先が現存在自身であることを示す例として、宿を得ること（Unterkommen）が現存在の存在の可能性の一つとしてあげられ（SZ, S. 84）、第二編第一章では、最も極端な存在可能性として、死ぬこと（Sterben）があげられる。ハイデガーに従えば、死もまたわれわれの存在可能性の一つであり、しかも、数多の存在可能性の中の一つというのではなく、最も極まった存在可能性と解される。なぜなら死は、私が存在不可能となる、という存在可能性であるのだから。

このように死を己の最も固有な存在可能性と見なす、というやり方には異論の余地もあるだろうが、いずれにせよこの点にハイデガーの現存在解釈の独自性が――したがって現存在の時間性、および歴史性の議論を特徴づけるものが――存することも確かである。では、そもそもハイデガーはなぜ、死を存在可能性として捉える必要があったのか。それは、ハイデガーが現存在をその全体存在（Ganzsein）において捉えようとしたからである。

現存在は日々の生活において、さまざまな事物との関わりに没入し、さまざまな事物との関係にいわば己を分散させている。

このように頽落する在りようを本質契機とする現存在を、その全体存在において捉えるためには、現存在自身の存在における「両端」、すなわち、誕生（始まり）と死（終わり）とが、現存在解釈の視野に入れられる必要があったのである。つまり現存在は、事物の全体存在と違い（Vgl. SZ, S. 242 ff.）、「生誕と死の間」のそのつどの伸展（Erstreckung）――ハイデガーはこれを現存在の生起と呼ぶ――という形で、初めてその全き「輪郭」が捉えられるもの、と見なされたのである（Vgl. SZ, S. 373）。そしてハイデガーはまず「死への存在（Sein zum Tode）」という現象の挙示から着手した。それは、死への先駆こそが、始まりへの関わりを我がものとさせる（反復させる）動因となる、と見なされたためである、と考えられる。

このように、先駆的かつ反復的な現在（すなわち瞬間）が、現存在の本来的な時間性と見なされるのであるが、本来的な時間性が到来から時熟するとは、いわば、現存在において私の死がそのつど切迫してくる、ということである。死が現存在の存在を取り囲むのである。そのような意味で時間性は有限（endlich）である（SZ, S. 329 f.）。有限であるからそのつど時熟するのである。ここでは、己の死は、いまだ実現していない単なる可能性なのではなく、「現存在は、実存するかぎり、事実的に死につつある」（SZ, S. 251）。このことは誕生についても言える。ただし、ハイデガーにおいて誕生と言われているのは、死の場合と違って、それ自身この私を孤立化させる契機ではない。ここに、「民族」[4]あるいは「世代」[5]の中に育ち込む、という現存在の存在性格があらわれている、と解することができるが、この点についてはこれ以上立ち入らないでおく。

三―二、世界時間

では、このような時間性（Zeitlichkeit）から、今時間としての通俗的時間概念はどのようにして「派生」すると見なされるのであろうか。その前にわれわれは世界時間（Weltzeit）と呼ばれる現象について見ておく必要がある。

周知のように、ハイデガーは現存在を世界-内-存在（In-der-Welt-sein）として解釈するので、現存在自身の開示と世界の開示とは一体的であり、現存在の時熟は、必然的に世界の時熟を伴う、と見なされる（Vgl. SZ, S. 365）。（ハイデガーにとって世界は主観的でも客観的でもある、という性格をもつ（Vgl. SZ, S. 366）。）世界のほうも、あくまで現存在との関わりにおいて、根源的な意味で時間的性格を帯びることになるのである。ただし、世界といってもハイデガーの場合二義的であり、現存在がその内に住まうところの世界、すなわち実存範疇としての世界とは、眼前に見出されうるさまざまな事物の総体（「世界」）のことではなく、むしろ、そのような事物との関わりのうちへと先行的にわれわれの存在を差し向けているところの、そのつ

どの有意味性(Bedeutsamkeit)の全体的連関のことを指す。われわれが世界の中の具体的な事物と関わることができるのは、われわれがそのような有意味性を暗に(つまり非主題的に)理解してしまっていることに拠ると見なされる。この有意味性の理解は、現存在の存在に属し、それゆえ結局現存在の時間性に基づいているのである(SZ, S. 365)。

このように、世界に或る種の二義性が認められる以上、世界時間にもまた同様の二義性が認められる、と考えられる。これはまた、ハイデガーのいう「世界の歴史」に彼自らが二義性を認めている(SZ, S. 389)のと同型である。つまり、世界のそのつどの時熟という場合の、いわば本来の意味での世界時間と、その時熟に基づいて世界内部の存在者が有することになる「時間の中で」(出会われる)という時間性格、すなわち時間内部性(Innerzeitigkeit)との二義性である。(もっともハイデガーは、世界の時間に関しては、「世界時間」と「時間内部性」とを用語上区別しているが。)

さて、『存在と時間』でハイデガーが分析を企てている実存範疇としての世界は、まずもって日常世界つまり周囲世界であるから、世界時間とは、われわれが日々の暮らしのなかで、「あの時(damals)」とか「今(jetzt)」とか「その時(dann)」という仕方で何気なく分節している時間にほかならない。(世界時間のこのような性格は、日付可能性(Datierbarkeit)と呼ばれる。)ハイデガーはこれらの時間規定を、時間性の三地平(記憶、現前化、予期)が「言表されている(sich aussprechen)」と見なす。したがって、時間性が三地平の統一として脱自的-地平的性格をもつのに応じて、世界時間も、そのつど様々な伸張性(Gespanntheit)をもつ、と見なされる。ここでいわれる「今」は、まだ、今時間をなす抽象的な「今」点ではなく、あくまで「戸がばたばた鳴る今」(SZ, S. 408)など、いわば具体的な内容(世界の事物との具体的な関係性)を伴ったかぎりでの「今」である、という点が注意されるべきである。

このように、一口に「今」といってもハイデガーにおいてそれは両義的であり、このことは上述の世界の両義性の反映であると言えよう。つまり、本来の「今」現象は決して無限の今系列(今時間)をなす均質な今点のようなものではなく、例えば一九二七年の講義でも述べられているように、それ自身「移行(Übergang)」あるいは「次元(Dimension)」という性格をもつのであるが(GA24, S. 352)、その半面、われわれが「今」と言う際にまず捉えられるものは、今眼前に出会われているものであり、その出会いを可能にしている自己自身の時間性(あるいは世界時間)は、差し当たり大抵われわれの視野には入らないのである。

三―三、今時間（通俗的「時間」）

第二節で触れたように、試験講義で言われていた物理学的時間概念は、「無限で、過ぎ去りゆく［だけの］不可逆的な今系列」（SZ, S. 426）という「今-時間」の原型である、と考えることができる。では、物理学的時間概念と今-時間とを結ぶものは何なのだろうか。それは「時計」である。一九二四年の講演『時間の概念』では、例えば次のように言われている。「時計は一つの物理学的体系である」（BZ, S. 9）。時計は、時間を「測定する」システムである点で物理学的性格をもつ半面、われわれにとって極めて身近な道具でもあり、われわれは日々時計で時間を見ながら時間と関わっている。

さてハイデガーは、現存在の時間性および世界時間と今-時間とを対比させるのだが、このように、時計から読み取られる時間と、根源的時間とを対比させるやり方は、「空間化された時間」と純粋持続という、ベルクソンによる対比を思い起こさせる。しかし時計を通して読み取られる「時間」のハイデガー的性格づけは、次の点でベルクソンのそれと異なる。[6] つまりハイデガーは、時計で測ることによって時間が空間化されるのではなく、むしろ時間内部的なもの（指針）の現前化がなされる、[7] と解釈する。具体的に言えば、時計――必ずしも精密機器としての時計である必要はなく、いわゆる自然の時計（物の影など）も含まれる――を用いて時を「数える」ということは、「指針の諸位置（Zeigerstellen）を現前化しつつ追いかけること」（SZ, S. 420）を意味する、とハイデガーは解する。こうして、「時計使用において『視られた』世界時間」（SZ, S. 421）が、今-時間である。

この今時間こそ、われわれが通俗的に抱いている時間表象である。ハイデガーは世界時間と今時間とを鋭く対照させる。すなわち今時間からは、世界時間のもっている有意味性、日付可能性、伸張性という構造契機が、決定的に抜け落ちるとされるのである（SZ, S. 422-3）が、このことは、眼前のものへの没入による現存在の自己喪失の帰結と解される。つまり現存在は、自己自身が根源的時間であることを忘れ、眼前の事物の「時間的」性格（時間内部性）に専ら囚われるという、まさに自己自身の構造によって、却って眼前のものから「時間」を今時間（ないし今系列）として思い描く、と解されるのである。したがって次のように言われる。「時間を、無限で、過ぎ去りゆく［だけの］不可逆的な今系列とする、時間の通俗的な性格づけは、頽落する現存在の時間性から発源する」（SZ, S. 426）。

四　現存在の歴史性

このように通俗的な時間表象の派生性を跡づけたあと、ハイデガーは次のように述べる。「通俗的な時間表象は自然な［ある

いは当然の」権利をもっている。この時間表象は現存在の日常的な在りように、差し当たり支配的な存在理解に、属している。それゆえ、差し当たり大抵、歴史（Geschichte）もまた、公共的には、時間内部的な生起［＝出来事］（innerzeitiges Geschehen）として、理解されるのである」（SZ, S. 426）。

しかし前節で見たハイデガーの「時間」論からも明らかなように、現存在の歴史性（もしくは現存在の生起）と呼ばれる現象は、ここで言われる「時間内部的な出来事」と同列に論じることはできない。むしろ「歴史性という規定は、ひとが歴史（世界史的な出来事）と呼ぶものに先立つ（vorliegen）」（SZ, S. 19-20）とされる。つまり歴史性は、「それに基づいて初めて『世界の歴史』といったものが可能となる」（SZ, S. 20）ような生起として解釈されるのである。

この最後の節でわれわれは、『存在と時間』で言われる「世界の歴史」、および現存在の歴史性について論じるが、その前にわれわれは再び、第一節で取り上げた試験講義に立ち帰り、年代学が扱う歴史の時間、すなわち歴史年号の時間性格を簡単に取り上げることにしたい。というのも、われわれは歴史を認識する際、年代学的（chronologisch）な時間表象に頼るのが常であるが、そのような時間表象からハイデガーの言う歴史性を理解することは困難だからである。ちょうど、現存在の時間性という現象を、通俗的「時間」概念から理解するのが困難であるように。

四―一、年代学的時間

試験講義では、歴史科学における時間概念に固有の構造が明らかにされるうえで、年代学はわずかに引き合いに出されるにすぎず、しかもその位置づけは曖昧である。というのも、われわれが既に見たように、この講義でのハイデガーにとって、数系列で表現され得るということは、物理学的時間の性格と見なされるのであり、それに対してヒストーリッシュな時間は、本来「数学的に一つの系列（Reihe）によって表現されることができない」（GA1, S. 431）と言われるからである。したがって、量的規定を可能にする時間（物理学的時間）と、質的連関を可能にする時間（歴史の時間）という分け方をするとき、歴史年号の規定に携わる年代学の位置づけが曖昧になるのは、当然であると思われる。ハイデガーはこの点に関し、次のように結論している。すなわち「歴史科学の補助学であるヒストーリッシュな年代学は、［……］ただ、時間計算の開始（Beginn der Zeitrechnung）という観点のもとでのみ、ヒストーリッシュな時間概念の理論にとって有意味である」と（GA1, S. 432）。どこから勘定を開始するかを制定する（festsetzen）仕方が、歴史年号を質的に決定している、と見なされるのである（GA1, S. 433）。

以上が試験講義における年代学の捉え方であり、『存在と時

間』でも、この部分が、「年代学的時間と『歴史年号』を解釈する最初の試み」(SZ, S. 418 Fußnote)として指示されていることは、冒頭でも触れたとおりである。ただ、確かに年代学的時間（例えば西暦何年）は、例えばキリストの誕生のような有意味な出来事を起点として勘定が開始されるわけだが、差し当たり大抵われわれには、開始点の出来事そのものは大して意味をもたないのではないだろうか。ほんの最近の大事件でさえ、われわれの間では、すぐに風化してゆくのが常である。むしろ、われわれにとって歴史の年号は、差し当たり大抵ただの便宜的な記号にすぎない。[8] そして、われわれに馴染みの「世界史」とは、そのような年号の羅列のもとに書き込まれた過去の出来事の集積にほかならないのではないか。

四―二、世界の‐歴史（Welt-Geschichte）

しかし、ハイデガーが『存在と時間』で言う「世界の歴史」は、「世界」という概念においても「歴史」という概念においても、通常理解されている「世界史」の概念とは全く異なっている。それでは、ハイデガーの言う「世界の歴史」とはどのようなものなのか。

世界時間のところで少し触れたように、世界の歴史はハイデガーにおいて二義的である。すなわちこの現象には、現存在との本質的統一において世界が生起する、という側面と、その世界の内部で存在者が生起する、という側面とが含まれる（SZ, S. 389）。このことは、周囲世界分析の際、世界（有意味性）の開示が道具を道具として出会わせる、と解されたことの帰結であると言える。

われわれがここで注意したいのは、ハイデガーはこのような意味での世界の歴史を、歴史科学に先立つものと見なしている、ということである。すなわち「世界の歴史的なものは、歴史科学による客観化に基づいて初めて歴史的であるのではない。むしろ、世界内部で出会われつつ、自らに即してそれであるところの存在者として、歴史的なのである」(SZ, S. 381)、あるいは、「歴史科学の対象が道具というのようなものであり得るのはただ、道具がそれ自身に即して何らかの仕方で歴史的であるためである」(SZ, S. 380)。

しかしここで言われている「歴史的」とはどういうことなのか。その答えは世界の歴史からは出てこない。(それはちょうど、世界時間から、まして通俗的「時間」概念から、現存在の時間性が導出されないのと同様である。) むしろ「現存在こそが、第一次的に歴史的なものなのである」(SZ, S. 381)。

四―三、現存在の歴史性

第二節で既に触れたように、ハイデガーにとって現存在が歴史的であるとは、現存在が「脱自的‐地平的（ekstatsich-

horizontal) 時間性に基づき、己の既在 (Gewesenheit) において開かれているということ」(SZ, S. 393) であった。

しかし、先にも確認したように、脱自的－地平的時間性は、到来から時熟すると見なされ、また、本来的に歴史的な現存在において、到来の地平は（予期ではなく）先駆という様態をもつとされることから、次のようなテーゼが出てくる。すなわち、「死へと関わる本来的存在、すなわち時間性の有限性が、現存在の歴史性の隠れた根拠である」(SZ, S. 386)。つまり、現存在が己の既在に対して開かれるための、すなわち、「既在の実存可能性の本来的反復」(SZ, S. 385) のための根拠は、己の死という存在可能性への自己投企である。

このように、ハイデガーにおいて、死という存在可能性への自己投企と、既在の存在可能性の引き受けは、先駆的・反復的・瞬間という本来的時間性（本来的歴史性）において結びつく。このようにして現存在は、始まりと終わりの間の伸展たり得るのである。そしてこの始まりも終わりも、通俗的「時間」に属さないことは言うまでもない。それゆえ次のように言われるのである。「今および今日からの『時間的』隔たりが、[……] 本来的に歴史的な存在者にとっては第一次的に構成的な意味をもたないのは、この存在者が『時間の中に』存在しないとか、無時間的であるということによるのではなくて、むしろ、『時間の中で』眼前に存在するとか過ぎ去っていくとかやって来るようなものが、存在論的本質上、決してそれではあり得ないほどに、根源的に時間的に、実存することによる」(SZ, S. 381-2)。

しかし、こうして「可能的なものの静かな力」(SZ, S. 394) をことさらに開示するような「歴史科学 (Historie)」とは、果たしてどんな歴史科学なのか。それはもはや、通常の意味での歴史科学を指すとは思われない。ハイデガーは必ずしも明言していないし、それどころか彼はここでやはり通常の歴史科学について語っているようにさえ見受けられるのだが、われわれは、ここでハイデガーが歴史科学という（いわば事柄上不適切な）名のもとで真に考えているのは、「それ自身、歴史性によって性格づけられている」、「存在を問うこと」(SZ, S. 20) 以外の何ものでもない、と解釈すべきではないか。そう考えると、ここで「始まり」とは、現存在の現存在としての始まり、すなわち、存在とは何かと問う、という始源的な存在可能性のことを指すと考えられる。そしてそう考えるのがむしろ適切であるということは、中期以降のハイデガーのテクストによって裏付けられ得るであろうが、その課題にはまた稿を改めて取り組みたいと思う。

注

本稿では引用に際し、左に示す略号と、(GA の場合は巻数および) 頁数を用いて示した。なお、引用文における強調および [ ] 内の書き込みはすべて引用者による。

GA: Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann.
BZ: Martin Heidegger, Der Begriff der Zeit, Max Niemeyer, 1989.
DJ8: Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften, Band 8, 1992-93.
SZ: Martin Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1986.

(1) 通称「カッセル講演」の正式名は、「ディルタイの研究活動、および歴史的世界観を獲得するための現在の格闘」である。(オリジナル原稿は失われている。)

(2) 例えば一九二四年の講演「時間の概念」(これもオリジナル原稿は失われており、筆記に基づいて編集されたテクストが公刊されている)でも、「時間は現存在として理解される」と明言されている(BZ, S. 26)。

(3) 結局ハイデガーが時間性もしくは根源的時間と呼んでいるものはもはや時間とはいえまい、という批判がよくなされるが、ハイデガー自身それを承知している。次の文を参照。「われわれはなぜ、このような根源的な意味における到来、既在、現在の統一を、なおも時間と呼ぶのだろうか。それは何か別のものではないのか。[だが]この問いは、今、その時、あの時、ということが己を言表する時間性にほかならないということがわかるや否や、否定され得る」(GA 24, S. 380)。(ここで鍵になっているのは世界時間であることがわかる。)いわゆる「時間」概念の出所がわれわれ人間の在りようのうちにこそ求められるのだとすれば、「命名はよりすぐれたものより生ずる(a potiori fit denominatio)という命題に従って」(SZ, S. 329)、その在りようをこそ根源的「時間」と呼ぶことができると判断されているのである。

(4) 本稿は、現存在の共生起としての「民族共同体の生起」(SZ, S. 384)がいかなる事態を指すかという問題に、立ち入ることはできない。

(5) ハイデガーは、一九二四年の講演「時間の概念」やカッセル講演(一九二五)でも、そして『存在と時間』においても、「世代(Generation)」という概念をしばしば用いるが、その出所はディルタイである(Vgl. DJ8, S. 175)。

(6) ハイデガー自身その相違を強く意識している(Vgl. SZ, S. 18, S. 333, S. 32-3 Fußnote)。

(7) 現前化とはあくまで現存在自身の時間性の一地平であるが、現存在の時間性はたとえ非本来的な仕方であれあくまで三つの脱自態の統一として時熟するので、指針の現前化は予期(Gewärtigen)と記憶(Behalten)を伴う。(そしてハイデガーはこの現象を、時間についてのアリストテレスの有名な定義(『自然学』第四巻第十一章二一九b一以下)の由来と見なす。)

(8) 例えばヘルダーリンの詩「あたかも祭りの日に……」の解釈では次のように言われている。「『歴史の年号』は、[代々]渡されて来た習歩紐であり、人間の計算は諸々の出来事(Begebenheiten)をそれを頼りに並べるのである。この諸々の出来事は常にただゲシヒテの前景を占めるにすぎず、探索(ヒストレイン)にはただそのような前景のみが接近可能である。だがこの『ヒストーリッシュなもの』は決してゲシヒテ自身ではない。ゲシヒテは稀有である。ゲシヒテはただ、真理の本質がそのつど始源的に決定されるときにのみある」(GA4, S. 76)。

(9) 例えば一九二五年の講義におけるハイデガーは、「反復」ということで、もっぱら存在の問いの反復を考えている(GA20, S. 187 f.)。かつての現存在(ギリシャ人たち)が開いた存在可能性、つまり存在を問うという可能性を、われわれは今こそ反復すべきである、というわけである。しかしこの反復は伝統主義を意味するのではない。むしろ伝統に批判的でなければ、真の反復はできないという。

(どいりよ　哲学哲学史)